

2020年10月4日（日）  
世界聖餐日・世界宣教の日  
聖霊降臨後第18主日  
銀座教会 主日家庭礼拝

礼拝招詞

「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。

知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。

わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。」 詩編100編2～3節

主の祈り

**使徒信条** 我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。 アーメン。

讚美歌 140 いのちのいのちに

聖書 ルカによる福音書23章13～33節

牧会祈祷

ご在天の父なる神様、本日は、世界聖餐日・世界宣教の日の礼拝です。世界中の諸教会の上に神さまの祝福がありますように。全地に神さまの福音が宣べ伝えられますよう聖霊を注いでください。主イエスは、わたしたちを招いて、命のパンと杯をお与えくださいます。「味わい、見よ、主の恵み深さを。」世界中で執り行われる聖餐式に恵みを注いでください。御堂に集うことがまだ叶わず、主の食卓に与る日を待ち望むお一人お一人を顧みお支え下さい。わたしたちをあなたの良き知らせを宣べ伝える器としてお用い下さい。今、病の中にいる方、試練の中にいる方の傍らにいてください。今月もたれます信徒伝道週間の時を豊かな恵みの時としてお導き下さい。この一週間をあなたの恵みのうちに歩めますように。

この祈りを主イエス・キリストの御名によって、お捧げいたします。

アーメン

本日は、使徒信条の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」について学びます。そのために与えられた聖書がルカによる福音書の御言葉です。

主イエス・キリストを十字架刑に処刑することを決定したのは、誰でしょうか。

それは、ルカによる福音書23章24節によれば「ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した」とあるように、ピラトが主イエスの処刑を決定したのです。主イエスの十字架刑の決定にいたるまでには、本日の聖書に記されているとおり、ピラトの判断は、22 ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」でした。すなわち、ピラトは、尋問したけれども「この男」と呼ばれている主イエス・キリストには、死刑に当たる犯罪は何も見つからなかったのです。ピラトは、当初死刑ではなく、鞭打ちの刑でもって釈放するという十字架より軽い処分が妥当であると考えていました。当初のピラトは、主イエスが死刑に値する犯罪者ではないと考えていたのです。にもかかわらず、「人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった」ために、彼らの要求通りの決定を下したのです。

この成り行きから、主イエスを十字架につけたのは、ピラトではなく、「人々」と記されている当時の民衆であるユダヤ人だという理解が広がりました。そしてユダヤ人がキリストを殺したという宣伝が広まり、とうとうナチスドイツのホロコーストによってキリスト殺しのユダヤ人という安易なレッテルが貼られ、世界最大の悲劇的ユダヤ人虐殺にいったのでした。この言葉に踊らされたのは、キリストを信じる人々でした。この罪深い理解が、多くのユダヤ人を虐殺する事件を無責任にも見過ごしにしてしまうことにつながったのです。現在のヨーロッパでは、キリスト殺しのユダヤ人ということに関連するような誤解を生む言葉や理解に非常に敏感になっていると聞きます。

聖書を読み、ホロコーストを知っている私たちは、主イエスを十字架刑にしたのは誰かという問いに、どう答えたら良いのでしょうか。私たちは、民族差別を生み出すような思考回路から信仰によって自由にならなければなりません。

使徒信条の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」という信仰告白の言葉を、どのように理解したら良いのでしょうか。なぜ、ポンテオ・ピラトという主イエスの死刑決定者の固有名詞が信仰の告白の中に入っているのでしょうか。

私たちが信仰を告白する際、使徒信条のポンテオ・ピラトという名詞を唱える事は、どんな信仰を告白しているのでしょうか。果たして、ポンテオ・ピラトなる人物は、歴史上の人物なのでしょうか。

聖書に関係する考古学はめざましい成果をもたらしています。現在、ピラトの史実姓は、疑う余地はありません。カイサリヤの海辺において発見された石の碑文が、ピラトの史実性を証明しました。この石の碑文に、ポンテオ・ピラトについて詳しく記されていました。そして、彼の称号は、聖書に記されているとおり「プラエフェクトゥス」すなわち属州総督であることが確認されました。そのほかにも、主イエスが歩いた神殿へと通じる階段や破壊された神殿の壁が主イエスの時代のものであることが分かっています。また、主イエスをピラトに引き渡した大祭司カイアフアの骨壺が、エルサレム南壁近くで発見されています。さらにカイアフアの義理の父アンナスの素晴らしいお墓まで発見されていますし、主イエスと同時代、十字架刑で処刑された痕跡が発掘され木製の十字架に固定された板と足首の骨と釘がそのまま発掘され研究されています。

26節に登場するキレネ人シモンの骨壺が墓の中から見つかっています。そして、主イエスの十

十字架刑が執行されたゴルゴタの岩の場所が確定しています。

考古学の成果として理解出来ることは、ピラトがエルサレムの治安に責任を負う総督だったことと、主イエスの十字架を巡る聖書の舞台が現実のものとして受け取れることです。

このように、考古学の研究によって、ポンテオ・ピラトと共に主イエスが実在したことが更に明らかにされました。聖書の研究によって、ピラトの時代、主イエスが十字架刑で処刑されたことの史実が証明されていると思います。史実であるということは、古代の教会会議の結論の「**主イエスは真の神であり真の人である**」の「真の人」が明らかにされていることを意味します。この史実性の証明によって、古代の教会を揺さぶったグノーシス主義の説明が崩れることとなります。グノーシス主義者は、主イエスは十字架上で死んだのではなく、死んだように見えたのだと主張していたのです。しかし、そうではなく、主イエスは真の人間として本当に死んだのであることが告白されているのです。

私たちは、民族感情によってではなく信仰をもって聖書を読まなければなりません。聖書には、主イエスの十字架を巡る人々がよく登場します。その中で一人主イエスは、人間として苦しみを受け十字架につけられたのです。本日の聖書の御言葉の中には、主イエスご自身の苦しみの声や痛みは記されていません。しかし、主の言葉が響いてきます。

「26 人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。27 民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。28 イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。

29 人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。30 そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言い、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言い始める。31 『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

ここに記されている主イエスの言葉は、「わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け」です。主イエスがポンテオ・ピラトのもとに苦しみをうけたということは、人となった神が人間の苦しみを苦しんで下さったということです。私たちが主イエスの代わりに主イエスの痛みを覚えて共感して、主イエスはさぞくるんだことでしょうかと主イエスの苦しみを思い巡らすのではなく、主イエスが私たちの苦しみを苦しんでくださっていることを信頼して、私たちが自らの苦しみを苦しむことが大切なのではないのでしょうか。

私たちは、調子の良い時は、主イエスの苦しみを覚えていることが出来ますが、いざ、自分が苦しみのどん底に落とされた時、私たちは自分のことだけで精一杯になり、キリストの十字架を見上げることもしなくなるのです。主イエスが人間として地上の苦しみを担って下さったことを忘れることなく、「自分と自分の子供たちのために泣くこと」が求められているのです。主イエスこそ、孤独の中で「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」ておられるのです。主イエスこそ肉体の痛みをもって十字架刑に処刑され、この地上で経験する最も残酷な苦痛を十字架上で経験しておられるのです。

主イエス・キリストが十字架にかけられたということは、およそ人間が経験する苦しみを神自ら苦しんで下さったということです。誰が主イエスを苦しめたのでしょうか。それは、ピラトだけではありません。アンアスや大祭司カイアファだけでもありません。神の民と呼ばれ、選ばれた民と自負していたユダヤ人だけが主イエスを苦しめたのでしょうか。それだけでなく、神を仰ぐ全ての人間が主イエスを苦しめているといわなければならないと思います。今礼拝している、私たちこそ

、主イエスを苦しめているといわなければならないのです。主イエスは人間の罪の結果を引き受けて、苦しみを受けられたのです。しかも、こんなはずではなかったというような思いではなく、父なる神に祈りながら、神の御心を受け入れながら苦しまれたのです。神の御心を受け入れながらということは、愛の決意をもって苦しまれたということです。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という信仰の告白は、現実には史実としてあの日、ピラトのもとで神の愛の決意をもって苦しんでおられる主イエスのお姿を信仰をもって覚えたいと思います。キリストの苦しみは、父なる神への信頼と服従を示しています。そして、同時に私たちへの愛が働いているのです。神の愛の決断が主イエスを十字架の道へと歩ませました。神への信頼と服従をもって主イエスは苦しめられているのです。

私たちは、御言葉を通して主イエスの苦しみを直視しなければなりません。そして、私たちが主イエスの苦しみを人ごととするのではなく、私たちに与えられている苦しみをしっかりと神への信頼と服従をもって、受け止めたいと願います。

**祈 禱** 天の父なる神さま。私たちが十字架上の主イエスの苦しみを見上げる時、目をそらせることなく、しっかり見つめさせて下さい。主イエスの御苦しみをとおして、神への信頼と服従を心に刻むことを得させて下さい。愛の決意を現す主イエスの御苦しみを覚えさせて下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。 アーメン

**祈 禱** (各自、自由にお祈りください)

祈禱課題 世界聖餐・世界の宣教を覚えて  
信徒伝道週間を覚えて  
自粛生活の中、疲れを覚える方々を覚えて

**讚美歌 332 主はいのちをあたえませり**

**献 金**

**頌 栄 544**

**祝 禱**

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。

アーメン